
POSS-ing における英語属格主語に関する 制限について*

鈴木 達也

アブストラクト

本稿は、(i) のような POSS-ing の属格主語に関連して、統率束縛理論の下で格標示と θ 標示の関連性を指摘した Chomsky 1986 の提案を、現在のミニマリスト・プログラムの枠組みの下で再解釈するものである。

(i) I was impressed by [John's playing Bach on the guitar last night].

Chomsky 1986 は、(ii) に見られる動名詞と時制文の間に見られる対比を説明するために、(iii) のような属格標示と θ 標示を連結させる提案を行ったが、本稿では、ラベル付与のための labeling algorithm の前提条件となる探索条件 (iv) を提案して、奇妙な POSS-ing の属格主語の特性が原理的に説明されることを示す。

(ii) a. *John's seeming to be intelligent

b. John seems to be intelligent.

(iii) If α is an inherent Case-marker, then α Case-marks NP if and only if
[α] θ -marks the chain headed by NP.

(iv) labeling algorithm (LA) の探索対象 {XP, YP} において, XP, YP は互いに θ 関係を持たなくてはならない。

また、提案 (iv) により、(v-vi) が示すような seem と形容詞に関わる虚辞の属格表現に見られる対比についても、seem と形容詞の θ 標示の違いによって原理的な説明が与えられることを示す。

(v) a. It seems [that John is intelligent].

b. *its seeming [that John is intelligent]

(vi) a. It is obvious [that John is intelligent].

b. its being obvious [that John is intelligent]

1. 導入

本稿は、(1) の [] で囲まれた動名詞 (POSS-ing) の主語の属格標示に関わる制限についての研究である。動名詞には様々な種類があるが、POSS-ing は、動詞的動名詞 (verbal gerund¹⁾) の一種として、動名詞部分は節のように動詞句が存在する一方、主語部分は名詞句のように属格標示が行われる。

(1) I was impressed by [John's playing Bach on the guitar last night].

POSS-ing の主語の属格標示については、POSS-ing の構造やそれと関わる属格の認可のメカニズム等、多くの興味深い問題があるが、本稿では、その中で、(2) に見られるような対比に焦点を絞って議論することとする。

(2) a. *John's seeming to be intelligent (Chomsky 1986: 196)²⁾

b. John seems to be intelligent.

POSS-ing (2a) は、節である (2b) に対応すると考えるのが自然であるが、(2b) の節の場合は、いわゆる上昇構文 (Raising construction) の例として、補文の述語である intelligent の主語 John が主節主語の位置に移動しても問題がないにもかかわらず、その POSS-ing 版である (2a) では、John を上昇させて属格主語にするのは非文法的である。

なお、節の場合は、(3a) のように、補文の主語を上昇させずに、埋め込み節で主格標示させることが可能であるが、動名詞の場合には、(3b) が示すようにその選択肢は存在しない³⁾。

1) 動詞的動名詞と名詞的動名詞の分類については、Wasow and Roeper 1972 を参照のこと。

2) (2a) の -ing は現在分詞の -ing ではなく、動名詞の -ing であり、したがって (2a) の非文法性は、seem の進行形によるものではない。

3) (3b) の非文法性に関しては、第 4 節を参照のこと。なお、(3b) は、Chomsky 1986: 196 からの引用であり、容認度の判断は Chomsky による。

(3) a. It seems [that John is intelligent].

b. *its seeming [that John is intelligent]

(3b) では, (3a) の場合と同様に, 属格の虚辞 its と外置された that 節 that John is intelligent が関係を持つが, 非文法的である。Chomsky 1986 は, これらの対比について, 格付与に関する一様性条件 (Uniformity Condition on Case Assignment) を提案して分析を試みたが, 理論的枠組みが変わった今, Chomsky 1986 の洞察を再解釈することが必要である。本稿は, 拙論 (鈴木 2022) の提案を踏まえて, ミニマリスト・プログラム (Chomsky 1995, 2000, 2001, 2004, 2013, 2015 他) の特にラベル付与の理論を踏まえて, POSS-ing の属格主語標示について論じるものである。なお, 本稿の構成は次のようになっている。第 1 節の導入に続いて, 第 2 節では Chomsky 1986 の関連する提案について振り返る。第 3 節で鈴木 2022 における関連する提案を簡単に紹介した後, 第 4 節で Chomsky の提案と鈴木 の提案の融合を試み, その帰結について簡単に論じる。第 5 節は, まとめである。

2. Chomsky 1986 : 格付与に関する一様性条件 (Uniformity Condition on Case Assignment)

Chomsky 1986 は, (2a) の非文法性を, (4) のような, 格付与に関する一様性条件 (Uniformity Condition on Case Assignment) を用いて説明している。

(4) If α is an inherent Case-marker, then α Case-marks NP if and only if [α]
 θ -marks the chain headed by NP⁴⁾.

(4) は, 当時の統率束縛理論の枠組みにおける格付与のシステムを拡張するもので, 当時仮定されていた格付与は, 実際には, D 構造で語彙範疇の特

4) (4) は, Chomsky 1986: 196 からの引用である。なお, [α] は, 筆者による追記である。

性の下で行われる内在格 (inherent Case) の付与 (Case assignment) と S 構造で構造に基づいて行われる格の具現化 (Case realization) の二つから成り、(4) でいう Case-mark (格標示) (= Case assignment と Case realization を合わせたもの) は、D 構造で付与される内在格の S 構造での具現化は、D 構造で名詞句を θ 標示する範疇の統率によって行われなければならないとするものである。

属格標示に関して、D 構造での内在格の付与が、D 構造で名詞句を θ 標示する範疇の統率によって行われると仮定することで、例えば (5) と (6) の対比が説明できる⁵⁾。

(5) *John's seeming to be intelligent (= (2a))

(6) a. [John's being talked about all around town] is a big problem.

b. [John's being feared by everyone] is not a problem.

(7) *John's_i seeming [_{t_i} to be intelligent]

(8) a. [John's_i being talked about _{t_i} all around town] is a big problem.

b. [John's_i being feared _{t_i} by everyone] is not a problem.

(7), (8a-b) は、それぞれ (5), (6a-b) の構造を示したものである⁶⁾。

(5) の John も (6a-b) の John も派生主語であるが、(6a-b) の John については、移動前である D 構造の段階でそれぞれ talked about および feared の補部であるため、移動によって形成される連鎖 (John's_i, _{t_i}) が talked about および feared によって θ 標示される。一方 (5) の John の場合は、D 構造では to be intelligent の主語であり、移動によって形成される連鎖 (John's_i, _{t_i}) は seem とは θ 標示の関係にない。したがって、(4) の一様性の条件を満たすことができず、非文法的と見做されることになるのである。

(6a-b) は受け身の例であるが、英語には (5) の上昇構文と同様な関係を

5) (6a-b) は、いずれも (Haegeman and Guéron 1999: 481) からの引用である。

6) (7-8) は、Chomsky 1986 当時仮定されていたように、痕跡理論による表示を採用している。

持つ (9b) のような例外的受け身文が存在する。

- (9) a. We believe John to be intelligent.
 b. John is believed to be intelligent.
 c. John_i is believed [_{t_i} to be intelligent].

(9b) の主語 John は、believed の補文の主語であり、believed とは θ 標示の関係にない。このことは、(9) の動名詞版である (10) の属格標示は非文法的となることを予測し、実際、(10) は非文法的である。

- (10) a. *John's being believed to be intelligent disturbed me.
 b. * [John's_i being believed [_{t_i} to be intelligent]] disturbed me.

(10a) は、概略 (10b) のような構造を持つと考えられるが、連鎖 (John's_i, t_i) は believed に θ 標示されないため、一様性の条件 (4) を満たすことができず、非文法的となるのである。(10) の非文法性の理由は、単に受け身が関係しているわけではないことに注意されたい。(6a-b) が示すように、たとえ受け身が絡んでいても、(4) の条件を満たしていれば、文法的なのである。

しかしながら、理論的な枠組みが統率束縛理論からミニマリスト・プログラムへと変わり、文法における統率の概念は重要性を失った。また、D 構造を仮定する必要性もなくなり、(4) の条件に基づく説明は、その基盤が崩れてしまった。これは、(2a-b) の対比に関する説明が、また振り出しに戻ってしまったことを意味している。本稿では、ミニマリスト・プログラムの枠組みの下で縮約関係節の分析を行った鈴木 2022 の提案を踏まえて、Chomsky の洞察の再解釈を試みることにする。

3. 鈴木 2022

鈴木 2022 は POSS-ing の分析ではなく、(11) のような「縮約関係節」と呼ばれる -ing を用いた関係節の分析であるが、Chomsky 2013, 2015 のラベル付与の理論を踏まえた分析を行っている。

- (11) I believe the people being interrogated by the FBI have nothing to do with the recent incident. (= 鈴木 2022 (10a))

鈴木 2022 の分析は、同じく縮約関係節の分析を行った鈴木 2018 の分析のいわば拡張版であり、(12a-b) の対比に関する説明の糸口を提供するものであった。

- (12) a. We have been looking for a trace of life forms that seem to have been extinct for two billion years. (= 鈴木 2022 (2a))
b. *We have been looking for a trace of life forms seeming to have been extinct for two billion years. (= 鈴木 2022 (2b))

定形関係節 (12a) において seem が用いられることは何ら問題がないのに対して、seeming を用いた縮約関係節 (12b) は非文法的である。鈴木 2018, 2022 の縮約関係節の分析の詳細な説明はここでは控えるが⁷⁾、本稿に関連する提案として、(13) のような示唆をしている⁷⁾。

- (13) labeling algorithm (LA) の探索対象 {XP, YP} において、XP, YP は互いに θ 関係を持たなくてはならない。

鈴木 2022 は、Chomsky 2013, 2015 のラベル付与の理論を採用している。ラベル付与の理論では、従来の生成文法理論の枠組みにおける句構造規則や X' 理論とは異なり、構造を生成するメカニズムとラベルを付与するメカニズムを切り離し、ラベルを付与するメカニズムとして新たに labeling algorithm (LA) を仮定している。LA は、併合により構造が構築されていく際に、ラベルを決定する主要部を特定するメカニズムであると言えるが、LA によって主要部が決定できず、ラベル付与が適切に行われなければ、インターフェースで適正な解釈が得られないと仮定されている。

LA は大きく分けて二つのケースがあり、一つは、主要部-補部の関係がある場合で、この場合は主要部がラベルを決定する。もう一つは、{XP, YP}

7) (13) は、鈴木 2022 : 47 からの引用である。

のように最大投射同士が併合された場合で、この場合は何らかの特別な操作が行われない限り主要部を決定することができず、その結果、ラベルの付与もできないことになる。{XP, YP} のような状態になった場合の主要部の決定は、XP, YP のどちらかが移動（内併合）すれば、移動した要素は LA には見えなくなり、結果として移動しない要素が主要部と解釈され、ラベルを決定すると仮定されている。その他、XP, YP の ϕ 素性や Q 素性が顕著で共有される場合は、ラベル付与が行われるとも仮定されている。（詳しくは、Chomsky 2013, 2015 を参照）

一つの例として、(1) の POSS-ing 部分である John's playing Bach の派生を (14) で見てみよう⁸⁾。

(14) a. John's playing Bach

b. [_{β} [_{DP} John's] [_{v*} playing Bach]]

c. [_{DP} John's] T [_{v*} [_{DP} John's] [_{v*} playing Bach]]

d. [_{α} [_{DP} John's] [_T [_{v*} [_{DP} John's] [_{v*} playing Bach]]]]

(14b) は {XP, YP} の状態であり、このままでは主要部の決定ができず、 β のラベル付与ができない。しかしながら、(14c) のように主語 DP の John's が TP 指定部に移動すれば、(14b) の β 内部にある John's は LA には見えなくなり、{XP, YP} の状況が解消され、[_{v*} playing Bach] のみが LA に見えるようになる。これにより主要部が決定され、(14b) の β は (14c) のように v^* とラベル付与がなされることになる。

(14d) の段階で再び {XP, YP} の状態となっており、このままでは主要部が決定できず、(14d) の α のラベル付与が適切に行えないことになるが、属格 DP の John's はさらに DP 指定部に内併合されると考えられるので、{XP,

8) POSS-ing の内部構造は必ずしも明らかではないが、(14) では便宜的に TP の構造を持っていると仮定している。なお、POSS-ing は主語が属格であることから、POSS-ing 全体としては DP であると仮定している。（Abney 1987, Suzuki 1988, 2013, Pires 2006 他参照）

YP} の状態は解消されるのである。

(12a-b) の対比に戻ると、鈴木 2022 の分析では、定形関係節である (12a) の場合も縮約関係節である (12b) の場合も先行詞 *life forms* と *seem, seeming* との間には θ 関係がなく、その意味では、(12a) も (12b) も (13) によって LA の探索対象にはなり得ず、どちらもラベル付与が行われないので解釈不能となるはずであるが、定形関係節である (12a) の場合は、縮約関係節である (12b) の場合とは異なり、CP が存在し、((12a) では補文標識 *C (=that)* があることに注目されたい。) C-T 関係によって C から T への素性の継承が行われ、共通な顕著な素性 ($\langle Q, Q \rangle$ や $\langle \phi, \phi \rangle$) によってラベル付与が行われるとしている。

4. POSS-ing における属格標示に関わる制限について

前節で、鈴木 2022 の縮約関係節の分析の過程で提案された labeling algorithm (LA) の制限について説明した。本節では、第 2 節で言及した Chomsky 1986 の洞察について現在のラベル付与の理論の観点から再解釈を試みることにする。

第 2 節で説明したように、Chomsky 1986 は、(2a-b) の対比を、格付与に関する一様性条件 (Uniformity Condition on Case Assignment) (4) によって説明した。

- (2) a. *John's seeming to be intelligent
b. John seems to be intelligent.
- (4) If α is an inherent Case-marker, then α Case-marks NP if and only if [α]
 θ -marks the chain headed by NP.

このアプローチは、*seem* という動詞の θ 標示に関する特殊性を踏まえた分析であったが、第 2 節で指摘したように、*seem* の固有の問題ではなく、(10) のような例外的受け身も含む「上昇構文」に共通する問題である。

(10) a. *John's being believed to be intelligent disturbed me.

b. * $[\text{John's}_i \text{ being believed } [\text{t}_i \text{ to be intelligent}]]$ disturbed me.

理論的枠組みが変わり、統率の概念を用いる格理論は現在の理論的枠組みではそのままの形では用いることができないが、 θ 標示と絡めて (2) や (10) を分析する Chomsky 1986 の洞察は現在の理論的枠組みの下でも有効である。第 3 節で紹介した鈴木 2022 の (13) は、POSS-ing の属格に直接関わる制限ではないが、 θ 関係に言及する制限であるという意味で、Chomsky 1986 の提案との融合を意識したものである。

(13) labeling algorithm (LA) の探索対象 $\{XP, YP\}$ において、 XP, YP は互いに θ 関係を持たなくてはならない。

(2a) の場合も、(10a) の場合も、派生がそれぞれ概略 (15) のように $\{XP, YP\}$ の状態になった段階で LA による主要部の特定ができず、 α のラベル付与が不可能となる。このため、いずれの場合も解釈不能となり、非文法的と判断されると考えられる。

(15) a. $[_\alpha [_{XP} \text{John's}] [_{YP} \text{seeming } [\text{John's to be intelligent}]]]$

b. $[_\alpha [_{XP} \text{John's}] [_{YP} \text{being believed } [\text{John's to be intelligent}]]]$

(15) においては、 XP と YP の間に共通な顕著な素性 ($\langle Q, Q \rangle$ や $\langle \phi, \phi \rangle$) があるとは考えにくく、この救済条件による α のラベル付与も不可能であると考ええる。

この分析においてさらに精緻化が必要な点は、属格 DP John's の DP 指定部への移動についての対応であろう。属格 DP John's は、DP 指定部に移動すると仮定されており、その場合、(16) のように XP は LA にとって見えなくなるはずであり、 $\{XP, YP\}$ の状態が解消されると思われる。

(16) a. $[_{DP} [\text{John's}] [_\alpha [_{XP} \text{John's}] [_{YP} \text{seeming } [\text{John's to be intelligent}]]]]]$

b. $[_{DP} [\text{John's}] [_\alpha [_{XP} \text{John's}] [_{YP} \text{being believed } [\text{John's to be intelligent}]]]]]$

(16) のような状態になれば、 α の主要部は YP ということになり、ラベル

も YP のラベルが付与されるはずである。したがって、属格 DP John's の DP 指定部への移動を阻止する必要があるが、この点については、現時点では次のように考えている。

(13) の条件は、XP, YP が labeling algorithm にとって探索対象となるかどうかを決定する条件であるので、ここで探索対象と見做されなくなれば、そもそも内併合（移動）による救済条件も適用のしようがないと考える。言い換えれば、(13) は、labeling algorithm が適用されるかどうかを決定する前提条件であるということである。この点については、さらに慎重な検討を重ねることとしたい。

最後に、本稿の分析の帰結として、(3) と対比される (17) についても検討しておきたい。Chomsky 1986: 92 は、虚辞 *its* が何とリンクされるかによって差があることを指摘している⁹⁾。

(3) a. It seems [that John is intelligent].

b. *its seeming [that John is intelligent]

(17) a. It is obvious [that John is intelligent].

b. its being obvious [that John is intelligent]

Chomsky は、seem と be obvious では θ 標示に関して違いがあり、(18a) が示すように、seem の場合は that 節が主語になることはできないが、be obvious の場合は、(18b) が示すように、that 節が主語になることが可能であることを指摘した¹⁰⁾。

(18) a. * [That John is intelligent] seems.

b. [That John is intelligent] is obvious.

(18a-b) の対比は、seem の場合の that 節は seem の補部であり、 θ 標示も補部位置で行われるのに対して、形容詞の例である be obvious の場合は、

9) (3b) 同様、(17b) も Chomsky 1986: 92 からの引用である。

10) (18a-b) の [] は筆者が追加したものである。また、Chomsky 1986: 92 では、文の体裁を取っていないため、(18) では、筆者が微調整している。

θ 標示が主語の位置で行われることに起因すると考えられる。(18a-b)においてこのような θ 標示の差異があるのであれば, (3b) と (17b) の対比も Chomsky 1986 が提案する一様性条件 (Uniformity Condition on Case Assignment) (4) によって説明可能である。seem の場合は, 属格主語 its の格標示が一様性条件に抵触するが, be obvious の場合は抵触しないからである¹¹⁾。

Chomsky のこの提案は, 本稿の分析ではどのように再解釈されるであろうか?

本稿の枠組みにおいても, θ 標示の分析が鍵となるであろう。(17b) の構造が, (19) のような小節 (small clause) から派生されたものであると仮定するのであれば¹²⁾, its と obvious は θ 関係にあり, LA の探索対象となる。ここで何も起きなければ, 主要部を決定することができずラベル付与も不可能となり, 解釈不能で非文法的になることになるが, (19) のように XP である its が内併合 (移動) すれば, LA に見えるのは YP である obvious のみということになり, α は適正に AP とラベル付与されることになる。

(19) its being [_{α} [_{XP} its] [_{YP} obvious] [that John is intelligent]]

一方, (3b) については, 概略 (20) のような構造が想定される。

(20) * [_{α} [_{XP} its] [_{YP} seeming [that John is intelligent]]]

(20) は {XP, YP} の状態であり, 主要部を決定して α のラベル付与を必要があるが, [that John is intelligent] が seem の補部であり, この位置で seem によって θ 標示されているとすると, XP である its と YP である seeming 以下は θ 関係になく, (13) によって, LA の探索対象から外れることになる。また, POSS-ing の場合, XP と YP の間に共通な顕著な素性もな

11) 厳密に言えば, 一様性条件 (4) が関係する連鎖が通常の chain のみであるのか, あるいは外置された that 節と虚辞の連鎖も含む CHAIN であるのかという問題があるが, ここではやや簡潔な説明に留めている。詳しくは, Chomsky 1986 を参照されたい。

12) 外置された that 節の分析については, 今後の課題としたい。

いため、(20) では α のラベルを付与する手立てではなく、したがって解釈不可能による非文法性が導き出されるということになろう。

言うまでもなく、本稿の分析は、外置された *that* 節と虚辞の連結が文法でどのように分析されるのかによって大きく左右される。本稿で提案した分析の精緻化は、今後の研究の課題である。

5. まとめ

本稿では、動詞的動名詞の一種である POSS-ing の属格主語に関連して、Chomsky 1986 が統率束縛理論の枠組みにおいて提案した格標示の一様性条件 (4) に関わる洞察を、現在のミニマリスト・プログラムの枠組みの下で縮約関係節の分析を行った鈴木 2022 の提案を踏まえて再解釈した。Chomsky 1986 は、属格標示と θ 標示を連結させる提案を行ったが、本稿では、鈴木 2022 がラベル付与のための labeling algorithm の前提条件として提案した探索条件 (13) を用いれば、奇妙な POSS-ing の属格主語の特性が原理的に説明されることを示した。

(4) If α is an inherent Case-marker, then α Case-marks NP if and only if [α]
 θ -marks the chain headed by NP.

(13) labeling algorithm (LA) の探索対象 {XP, YP} において、XP, YP は互いに θ 関係を持たなくてはならない。

POSS-ing の構造や現在の理論における外置節の分析など、理論の精緻化に向けてさらに検討を重ねる必要がある問題も多く残されているが、POSS-ing の属格主語の問題と縮約関係節の分析をラベル付与の理論によって統一的に説明する糸口が得られたと考える。

参考文献

- Abney, Steven. 1987. The English noun phrase in its sentential aspect. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*. New York: Praeger.
- Chomsky, Noam. 1995. *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2004. Beyond explanatory adequacy. In *Structure and beyond*, ed. by Adriana Belletti, 104–131. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130: 33–49.
- Chomsky, Noam. 2015. Problems of projection: Extensions. In *Structures, strategies and beyond: Studies in honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16. Amsterdam: John Benjamins.
- Haegeman, Lilian and Jacqueline Guéron. 1999. *English grammar: A generative perspective*. Oxford: Blackwell.
- Pires, Acrisio. 2006. *The minimalist syntax of defective domains: Gerunds and infinitives*. Amsterdam: John Benjamins.
- Suzuki, Tatsuya. 1988. The structure of English gerunds. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Suzuki, Tatsuya. 2013. On genitive subjects in English. In *Deep insights, broad perspectives: Essays in honor of Mamoru Saito*, ed. by Yoichi Miyamoto, Daiko Takahashi, et al., 361–380. Tokyo: Kaitakusha.
- 鈴木達也. 2018. 「英語縮約関係節の構造について」. 『中部英文学』第37号, 21–29, 日本英文学会中部支部.
- 鈴木達也. 2022. 「『英語縮約関係節』における制約について」. 島越郎, 富澤直人他編『ことばの様相：現在と未来をつなぐ』, 40–51. 東京：開拓社.
- Wasow, Thomas and Thomas Roeper. 1972. On the subject of gerunds, *Foundations*

of Language 8, 44–61.

- * 本稿の執筆にあたり，例文の容認可能性について Anthony Cripps 氏と William Purcell 氏の協力を仰いだ。この場を借りて両名に感謝の意を表したい。なお，文法的容認度の判断も含めて，本稿における問題については，すべて筆者がその責を負うべきものであることは言うまでもない。